

## 農業現場に役立つ「農作物中のカドミウム低減対策技術集」を刊行

カドミウム (Cd) は、土壌に広く分布し農作物中には必ず含まれていますが、低濃度でも長期間摂取すると腎臓に蓄積して腎機能障害を引き起こす原因となるので、国内外で食品中のCd基準値を定めるなど低減化への取組がなされています。

農環研では、食の安全に係わる環境問題を主要な研究テーマに掲げ、Cdの問題についても従来から重点的に研究を進めてきました。その結果、客土に代わるCd汚染土壌修復技術として、「化学洗浄による浄化技術」と「Cd高吸収イネ品種による浄化技術」を開発するとともに、作物へのCdの吸収・移行抑制技術として、低Cdイネ品種の育成や畑作物の吸収抑制技術

など、様々な興味深い成果を得ています。そこで、これらの成果を農業現場で役立てるために、対策技術集を作成しました。記載した技術はいずれも農業関係者にとって有用な情報ですが、特に上述の二つの修復技術はマニュアルの体裁にまとめ、すぐに活用できるようになっています。

この技術集をご希望の方は、土壤環境研究領域・西尾 (TEL 029-838-8311) までご連絡ください。また、農環研のウェブサイト (<http://www.niaes.affrc.go.jp/magazine/132/mgzn13207.html>) から電子ファイルも入手できます。

(土壤環境研究領域長 西尾 隆)

## 「土壌情報閲覧システム」を更新

農環研が公開している「土壌情報閲覧システム」([http://agrimesh.dc.affrc.go.jp/soil\\_db/](http://agrimesh.dc.affrc.go.jp/soil_db/)) を2011年5月に更新しました。新たに作土層の理化学性データベース、土壌温度区分図、大日本帝国土性図が閲覧できるようになりました。

作土層の理化学性データベースでは、農林水産省が行った土壤環境基礎調査 (1979年-1998年の間、5年ごと、約20,000地点を対象) と土壤機能モニタリング調査 (1999年-2003年、約5,000地点を対象) のデータから、作土層の物理性や化学性の測定データを土壌の種類・地目毎に全国平均値を算出したものを閲覧できます。

土壌温度区分図のページでは、表層下30-50cmの平年土壌温度と土壌温度区分を調べることができます。土壌温度は農地に施用された有機物資材や土壌有機物などの分解に強く影響を及ぼすことが知られていますので、適正な堆肥施用量や農地の炭素貯留量を算定する際に重要な知見を提供できます。

大日本帝国土性図のページでは、明治から昭和初期にかけて作成された土性図 (縮尺1/10万) が閲覧できます。明治15年にドイツから農林地質学者マックス・フェスカを招き、調査法や作図法などの指導を受けた

ことから、フェスカ式土性図とも呼ばれており、地表下3mまでの土性 (砂、シルト、粘土の重量割合で区分された粒径組成) と地質で区分されています。なお、この土性図は全国土を対象として描かれた詳細な土壌図としては世界最古のものであり、歴史的にも貴重な資料です。

今後も利用者の皆さまからの意見・要望を参考にして、コンテンツの充実や操作性の向上に努めますので、感想などをいただくと感謝と喜びに堪えないところです。

(農業環境インベントリーセンター 高田 裕介)

